

〈分担研究者報告〉

「学習障害に関する研究」  
まとめと今後

竹 下 研 三

要約： 学習障害には疾病概念と障害概念がある。協力者の研究は、概念からの研究、心理検査からの研究、神経生理学からの研究、心理発達からの研究、教育指導やリハビリテーションからの研究、広汎性発達障害や多動障害などからの研究であった。概念に対するわれわれの考えと今後に解決されねばならない研究方向を述べた。

見出し語： 学習障害

リサーチ・クエスチョンに対するまとめと学習障害研究の今後の課題についてまとめる。

この研究班に求められたリサーチ・クエスチョンは、

- (1)学習障害の診断基準はいかなるものか
- (2)学習障害は中枢性の障害によるものか
- (3)学習障害に対する何らかの介入効果はあるのか、であった。以下に、このまとめを記載する。

なお、研究協力者の共通した考えは、学習障害児を含めて教育・福祉関係者への対応は障害概念であるDSMの立場をとり、研究の基本態度は疾病概念であるICDの立場をとって研究を進めてきたと考える。

(1)学習障害の診断基準

研究班として、全米学習障害合同委員会、および、その考え方を踏襲する文部省学習障害研究班の考え方を支持し、さらに各項目については以下のような考え方をとることで研究協力者のコンセンサスは得られたと考えている。

1. 「全般的な知的発達に遅れはない」。

標準化されたテストでこれを確認することになるが、現在では、WISC-Rがもっとも標準的な知的能力の評価法と理解する。その数値を71以上にするか76以上にするかについては定まった拘束をしない。使用する目的や結果の内容によって弾力的に考えられるべきものであろう。

アメリカ精神遅滞協会の1992年に提出されたコメントは知能テストにあまりにこだわることの弊害を指摘している。

2. 「基本的な障害は、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する点の能力と使用に問題を有している」。

基本的には、外界からの刺激の情報処理過程に問題を有している場合が多いと理解している。

3. 「発達期に明らかになる」。

一般に発達障害の年齢概念は福祉の立場からは18歳までとされる。この概念は学習障害を対象とするにはやや広範すぎ、混乱を招く。年齢対象は基礎学力の修得期間まで、すなはち中学を卒業する年齢までに明らかになる児童・生徒と理解したい。われわれの研究対象は主として就学前の子どもたちと就学後の子どもたちに分けて行っている。

3. 「中枢神経系に何らかの原因をもつ機能障害と考えられる」。

この原因の生じる時期は、神経系の発生以前の段階から生後まもなくの環境要因による影響まで幅広く含まれる。すなはち、遺伝・発生段階から可塑による神経系の影響までを含む。

4. 「視聴覚障害、知能発達障害、広汎性発達障害などと重複・併存して生じることもある」。

この場合の障害とは学習機能に主体的な問題の生じていることが原則である。

5. 「行動の自己調節、社会生活への適応性、対人関係などにおける問題が、学習障害を伴う形で現れることもある」。

これ自体が学習障害の本質ではない。しかし、注意欠陥多動障害との鑑別は重要であり、かつ、

しばしば鑑別に混乱することがある。

(2)学習障害は中枢性の障害によるものか

この障害が、基本的に中枢神経系の機能障害によってくることに疑問をはさむ研究協力者はいない。問題は、この障害をどう客観的に目に見える形で捉え、それをどう分類し、どう指導・教育に生かしていくのかがもっとも大きなテーマである。多彩な刺激法を利用した事象関連電位を中心とする研究が大きく成果を挙げてきている。この成果をここに敷衍でまとめることはできない。それぞれについて各年度の報告書を参照されたい。神経系の情報処理過程を電気生理学的に確認する研究方向は着実に発展を見せている。将来も精力的にこの研究は進められねばならない。

(3)学習障害に対する介入効果はあるのか

障害の基本が、外界からの情報処理過程の障害にあるとする場合、この視覚、聴覚からの刺激が処理されていく過程の神経生理学的研究は神経科学の最先端の領域である。正常機能の解析のみならず、障害組織でのシナプス可塑による代償過程の研究が、この介入効果に対する解答となろう。シナプスの可塑性は年齢の若い脳ほど形成されやすく、また、影響も受けやすい。このシナプス可塑性の分子機構の研究も神経科学の最先端領域である。画像研究とのドッキングによりこれらの基礎研究ははじめて人を対象として研究できる方向へと発展してきた。

ひるがえって、学習障害の介入について今すぐに考えられる具体的な方策への研究は、早期発見と早期療育、教育指導内容の理論化、一部の子ども

もたちへの薬物研究の3点に求められよう。今後の研究課題のひとつである。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 学習障害には疾病概念と障害概念がある。協力者の研究は、概念からの研究、心理検査からの研究、神経生理学からの研究、心理発達からの研究、教育指導やリハビリテーションからの研究、広汎性発達障害や多動障害などからの研究であった。概念に対するわれわれの考えと今後解決されねばならない研究方向を述べた。